
君の声

クルクルココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の声

【Nコード】

N8641U

【作者名】

クルクルココロ

【あらすじ】

宇宙物理学の講義を聴いているとき僕は一人の女の子に話しかけられた。一週間に一度だけあるその講義で僕は彼女と対話を重ね・・・。

(前書き)

是非縦書きにして読んでみてください。

繰り返した。世界は繰り返す。繰り返すことしかできない。僕は彼女をすでに見たことがある。愛したことがある。触れ合ったことがある。それは言葉ではない。感覚でもない。思念でもない。

君はどこにいる。この世界のどこかに今もいてくれているのだろうか。僕は信じたい。今もこの世界の、この世界の、そう、例えばどこかにある僕も知らない国の寂れた路地の片隅に静かに膝を抱え込んで、小さくしゃみを一ツしたりして、僕を待ってくれているのだろうか。

こうしている間にも確かに時は過ぎていく。世界では人々が絶えず動き回っているし、飛行機や列車といったものも大勢の人々を運んでいる。

一体どこから話せばいいのだろうか。この物語に始まりなどあるのだろうか。僕がこの話に無理矢理始まりというものをつけるとするならば、それは、僕が大学二年生になった頃になるだろう。そう。そのとき、僕は君と出会った。そんな気がするんだ。

怖がる必要はない。これは僕と君、二人の思い出に過ぎない。思い出だ。この思い出は実在しない。僕と君の心の中にある。でも、僕はときどき恐ろしくなる。もしかすると、君と僕の思い出は似て非なるものなのではないかって。

君は覚えているかい。君が君でなくなってしまったあのときのことを。僕はそのときのことを鮮明に覚えているよ。そして、それは今でも僕を締め付けるんだ。

「生きているってどういうことかしら」

僕は最初にその言葉を聞いたとき、その問いかけは僕に対するものではなくて、その言葉を発声した人自身に対する独り言のようなものだった。なぜなら、そのときは丁度、宇宙物理学の講義の真っ最中であつたし、そもそも僕には大学に友人など一人もいなかったからだ。そういうわけあつて、彼女がもう一度僕に向かって尋ねてきたときには、僕はいくらか混乱してしまった。

「あなたに聞いているのよ、高峯くん」

後ろを振り向くと、一人の女の子が右手で？杖をつきながら顔に笑みを浮かべ、僕の方を見ていた。僕は彼女の顔を注意深く観察してみたが、全く見覚えがなかった。まさしく初対面。少なくとも僕にとっては。

「会ったことある？」

僕がそう尋ねると彼女は小さく頷いた。これは困った。僕が知らないのに相手は僕のことを知っている。

「質問に答えてよ、高峯くん」

僕は彼女に尋ねられていたということを忘れてしまっていた。それもそうだ。こんなに唐突に後ろから質問を投げかけられて、何の疑問も抱かずにおいそれと答えられるわけがない。僕は失礼とわきまえながら彼女に質問をもう一度教えてくれと頼んだ。

「だから、生きてるってどういうことか教えてって言ったのよ」

「飽きることだよ」

そう僕が言うと、彼女は右手で頬杖をついていたのを左手に置き換えた。

「哀しくない？」

「哀しいよ」

僕は前を向き直った。教室前方の黒板には新たな数式が記されていた。

「ほら、君がくだらないことを聞くから、授業が勝手に進んじやったじゃないか」

「私の質問に反応したのはあなたよ。私に責任はないわ」

確かに彼女の言う通りだった。僕が彼女の質問を端から無視していれば、僕は宇宙物理学の講義を聞きそびれることはなかった。僕は少しやるせない気持ちになった。

講義が終わり、僕が席を立とうとすると彼女が僕を呼び止めた。

「高峯くんて、いつもここら辺に座っているの」

「大抵は」

「ふうん」

彼女はそう言ってまた頬杖をついた。僕はその日バイトがあったため、彼女にさよならを告げると急いで大学を出て駅へと向かった。

一週間後、また宇宙物理学の時間がやってきた。

「また会ったわね」

「ああ」

「私、考えたの。一週間前にあなたが答えたことを」

僕は後ろを振り向くことなく、前を向いたまま彼女の話を聞いていた。

「それで」

「私もそう思うようになった」

教室前方の教壇では、教授がひたすら黒板に向かって数式を並べ

ている。

「それは哀しいことだね」

「生きることは本来哀しいことよ。だから、生きることに對する解
釈が變化しても、そのことによってさらに哀しくなったり、あるい
は逆に楽しくなったりすることはしないの」

「そんなものかな」

そう言って僕は黒板に記されている数式をノートに写した。

講義が終わったので、僕はその日初めて後ろを振り返った。予想
通り彼女は右手で頬杖について、意味ありげな笑みを浮かべていた。
「今日はバイトないの？」

「あるよ」

そう言って僕は隣の席に置いておいた鞆を左肩に担ぎ、彼女にさ
よならを告げ教室を出た。

一週間が経った。

「あなたはどうして生きているの」

「暇だからだよ」

「どういうこと」

「死んだら暇だろ。生きていれば暇つぶしができる」

僕がそう言うと、後ろから彼女のくすっというかすかな笑い声が
聞こえた気がした。

「高峯くんて、面白いものの考え方をするのね」

「よく言われる」

「高峯くんが生きている理由は暇をつぶすためと思っていいいのかし
ら」

「要約するとそうなるね」

僕はノートのページが数式で埋まってしまったため、次のページ
を開いた。

「自殺した人はどうしたのかしら」

「暇になりたかったんだよ。きっと」

二人の間に沈黙が流れた。教授が黒板にチョークをこすりつける音が教室に響いている。

「なるほどね」

彼女は一言だけ述べて、それ以降、その日の講義中には話しかけてこなかった。

一週間後、僕は宇宙物理学の講義を聴いていた。今週は太陽に関する講義であった。それは恐ろしくつまらない講義であった。僕はしばらく我慢して講義を聴いていたのだが、次第にその退屈さに耐えられなくなった。僕は何気なく後ろを振り向いた。

「なあ、この講義つまらな……」

そこは空席だった。僕は奇妙な感覚に囚われた。僕の記憶が正しければ一週間前、この席に女の子がいたはずだ。そして、僕はその子と何か重要なこと、大切なことについて語り合ったのではなかっただろうか。

講義が終わったので、僕は席を立ち、彼女が座っていた席に座ってみた。彼女はこの場所から必死に僕に向かって語りかけていたのだ。それに対して僕は背を向けて答えていた。

教室から生徒が全員いなくなった。結局彼女は現れなかった。僕は仕方なく教室を出てバイトへと向かった。

一週間が経った後、僕はいつも通り宇宙物理学の講義が行われる513号室に入った。教室中央の後ろから3番目の席に座り、ノートを鞆から取り出した。

講義が始まった。今日は太陽系に関する講義をするらしい。ふと後ろを振り返ってみたが、やはりそこには誰もいなかった。

講義が終わった。案の定、最後まで彼女は現れなかった。僕は変な不安感にさいなまれた。もしかして彼女は最初からこの場所に現れてはいなかったのではないだろうか。あの女の子は報われることのなかった自殺者たちの霊だったのだろうか。だとすれば、僕は彼

女、彼らを救う言葉をかけてあげることができたのだろうか。

僕はもう一度、彼女の座っていたであろう席に腰掛けた。そこからは教室全体を見渡すことができた。

僕は何の気なしに右手で頬杖をついてみた。すると教室が斜めになった。僕はその奇妙な情景に心を委ねた。

どこか遠くからかすかな声が聞こえた気がした。それは気のせいだったかもしれない。でも僕は信じたかった。きっとあの声は彼女の最後の言葉。それも最も哀しい言葉。

「さよなら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8641u/>

君の声

2011年7月14日13時20分発行